

注目の人直撃

インタビュー

いよいよ断末魔の安倍政権だが、5年という長期にわたったことで、この国の政治の劣化は著しい。行政府も立法府も主権者である国民をないがしろにしているのではないかと、与野党攻防の最前線にいる野党第一党の国対委員長に、あらためて聞いた。

立憲民主党国対委員長

辻元清美

—今の政治状況について率直な感想は？

……もう、言葉に詰まるほど。初当選から27年ですが、こんな酷い状況は見たことがない。フェイク政権が臆とツケをどんどん噴出している、という印象です。

—どこに根本的な原因があるのでしょうか。

安倍政権はちょっと特殊な政権です。ひとつは保守ではない。右派というか、日本会議に通ずるような人たちの上に成り立ち、一定のイデオロギーで思考停止している気がします。同時に、全能感というか、安倍首相は全て自分が正しいというような姿勢。「こんな人たち」という発言に代表されるように、多様性を認めるのではなく、意見の違う人たちを敵だとみなす稚拙です。

—意見の違う人は敵。安倍政治はまさにそうですね。

安倍首相は国会で、「国民投票こそが最も国民の声を聞くこと」と言いました。

野党6党を必ずまとめる

次の連立政権をイメージして動いていきます



▼つじもと・きよみ 1960年奈良県生まれ、大阪育ち。早大教育学部卒。学生時代にNGO「ピースボート」を創設。96年衆院選で社民党から出馬し初当選。09年から民主党政権では、国交副大臣、首相補佐官を務めた。大阪10区選出。当選7回。

あの時は自民党にバラン感覚がありました。野党の意見も聞いて、落としどころを探した。今は野党の意見を全く無視したりする。それに、かつての自民党には、いい意味で日本の良さを生かしていくという意識があった。「美しい国」「道徳を大事に」などと言いつつ、不道徳なことを平然とやっているように見える今の政権とは違っています。

ね。長く続く権力は腐敗する。自民党が総裁任期を2期までとしたのは、先人の知恵だったのではないのでしょうか。それを自分が長くやりたいからと3期までに変更したのが安倍首相なのです。

だがそれは間違っている。たい人と変えたい人との間で、単なる単行きのなで、ヘイトが起きたり、ネット上にデマが飛びだりしている状況。そうした言論を抑制して、それが政治です。——社民議員時代、自民党で連立を組みました。当時と比べ自民党は変わりましたか？

意見の違う人を説得し合意点を見つけてるのが政治

国会議員は官邸の「家来」、官僚は「使用人」になっている



委員長として、与党とタフな交渉を続けています。国対委員長になったときに、自民党の森山裕国対委員長と「いい立法院にしようね」という話をしたのです。立法院の舞台、土台をつくるのが国対の仕事。その上でいろいろな議論をしなければならない立法院をつくりましょうね。加えて、いい立法院というのは、三権分立ですから行政のチェックも大事。そこに与野党も必要。こうして国会を基本にして、お互いに国対委員長として仕事を始めました。それで裁量労働制のインセンティブの問題では、最後は与野党も野党の意見を取り入れ、法案から裁量労働制拡大の部分を取り除くことに賛同して、政府と一緒に進めたわけです。森山委員長は私に、「政府の方針を変えさせた野党の予算の審議に敬意を表します」とおっしゃった。

——しかし、モリカケ問題では終始、与野党は政権擁護に回っています。——野党6党を必ずまとめる。野党6党を絶対的にまとめる。ものすごい。

共通のワンボイスを決めれば戦える。その延長線上に野党の受け皿ができる可能性は？

出でて、野党の指摘が正しいことも分かった。ここから、私がおぼろげに「ガタガタ言わんで一緒に来て」と言っています。私がおぼろげに「ガタガタ言わんで一緒に来て」と言っています。私がおぼろげに「ガタガタ言わんで一緒に来て」と言っています。